





597  
17



佛より神に思ふ事ハ為る習俗神より佛  
を以て心卜部神道奇蹟聲也中其  
日域相傳神道也其般異名に聖道  
一致也神に佛に儒に老に推して  
又浪子人の所

土和全書卷七

後中作下指神道集本由神主延佳謹記焉  
権祿百後四任下度會

萬葉集卷之八の所の浪布神と云ふ事

芝屋隨筆



一石濱道崔とよら廣東新語に於て  
亦文殊蘭なり崔道に似て小なり莖葉  
重なりて市に花に夏の末より秋まで開く  
葉よく潔白なり取百合の如く十二花  
漸く上へ咲きながら江州無胆海邊に多し  
花はくさくさの時に白木の花に及ぶと  
くさくさの匂の如くなり

本朝水品 宇治の三間 比 清瀧

音羽瀧水 朧のは水 大堰川 丹波水  
木津川の深く流る 五上平増井 布川  
の流 豊安の榎の葉井 醒井  
養老 富士の雲解 お州最上川  
肥後の水摩阿ふのたにたわらふありて  
くさくさの匂の如くなり

新大秋仙 後水尾院帝極の作を  
後宮御侍の前古の作







よむかたのつらき地あり

乞のかみ以伎とてし中板の古字は修り

書紀上の二首万葉集の七首あり 倭馬草

一と凡俗の一首あり 且てセテネハエトエト

と山つに正體の格あり 花七よりりれ物な

りりかとあり 天智紀童謡の阿喻擧曾

播施麻倍母曳岐とあり 然爾有許曾

虚蟬毛嬌乎相格良思とあり 催馬乐

その上信の巻  
千四のりや  
光とほり  
わらわら  
ははら  
こりとか  
あつと日本  
のそと  
古々  
上は  
す

元隆曰エテセ  
ハエト  
ヤウ  
書紀  
ニテ  
格ト  
久

大介のこぞとよりゆづり

世のこもを古年よ之と書てあるを

刑一誤り 若中ありの川行とあり

一はさりありあり 後下 宣き

のりびとよの直支の字の書換なり

と修いあり 篆士よりあり 出出

必中なる一詩時をの字は古く

詩賦と解あり 友な之とあり

宗江法所を前よりありとあり







多く杭を打てて舟を下り舟を水に流すは地  
をくわゆる細形舟杭舟の舟にせり流るる舟の  
箸の舟より舟より舟の舟を流すは舟の舟に  
舟の舟を流すは舟の舟に舟の舟に舟の舟に

若毛零来雨可神之崎狭野乃渡爾家裳不有国

神之崎者七上三下三上三下三上三下三上三下  
三上三下三上三下三上三下三上三下三上三下  
一行色の海也く新宮のとのを一里と云ふなり  
野村と云ふと宣告なり狭野の神武紀上狭野を越く  
即ち野村と云ふなり中畧大和の三輪なりと云ふ  
さう然しはよと人ある所のなりは野村と云ふなり  
舟の舟を流すは舟の舟に舟の舟に舟の舟に

櫻田部鶴鳴渡年奠方塩干二家良鶴鳴渡

岸と教取二百七  
十九小侍後集序

口塘川百身

上

口小舟後集

一舟に杭を打てて舟を下り舟を水に流すは地  
をくわゆる細形舟杭舟の舟にせり流るる舟の  
箸の舟より舟より舟の舟を流すは舟の舟に  
舟の舟を流すは舟の舟に舟の舟に舟の舟に

越海手結之浦矢客为而见者之见日本思櫃

万葉集三下八  
之之見見見  
美八八八



是日不能石根許其思官根乎引者難三  
シノノミ 曾エ 等標耳 結焉 於本ニ言キ鳥ニヤル 昔ハ山帝ニテ表門カク

推古紀既戸皇子命片岡ニ於テ其時道ニ  
 仇人の如ク云々

云々云々云々云々云々云々云々云々云々

云々云々云々云々云々云々云々云々云々

云々云々云々云々云々云々云々云々云々

云々云々云々云々云々云々云々云々云々

云々云々云々云々云々云々云々云々云々

山主者蓋雖有吾妹子之將結標乎人將解分  
モリノケタ けしハ若ヒヤトトクニル

田口廣廣呂死之取刑部垂廣呂作哥一首

百不足八十隅坂尔乎向为若過去人尔若益相余鴨

出行道知末世波豫妹乎將留塞毛置末思乎  
カネケヨリ 豫ハワラフ

劔太刀身尔取副常夢見津何如之怪曾毛若  
ナニノサカ

尔相為

不相念人乎思者大寺之娥鬼之後尔額衝如  
アヒオセバ











らへてはるる

古々集えのりて さいのねはひらきしるる

と流るのりてはるるはるるはるるはるる

中殿の流るるはるる 事き。ま。ち。み。る。い。用。言。結。ゆ

かり 事き。ま。ち。み。る。い。用。言。結。ゆ

事き。ま。ち。み。る。い。用。言。結。ゆ

一際流るるはるるのいさよひみわの事

の流るるはるるの事き。ま。ち。み。る。い。用。言。結。ゆ



素性法師家集

相板してあんならば  
丁三修り

時よあらゆる

志はばいほり別し

何とやくもたす

おれもあらずも

考ふ先心同の

日

殊凡を系

家行系

月

るまののち西口より

馬場のあつらひ

秋きよん

秋田はら

月

日

日



ねとまよふ如く此の如くなるといふ處も然る事あり

あつたは海にちかき島をみるや中しんり

あつたは海にちかき島をみるや中しんり

あつたは海にちかき島をみるや中しんり

あつたは海にちかき島をみるや中しんり

いふ事なる<sup>春末</sup>もたふ事なるは海にちかき島をみるや中しんり

あつたは海にちかき島をみるや中しんり

あつたは海にちかき島をみるや中しんり

あつたは海にちかき島をみるや中しんり

あつたは海にちかき島をみるや中しんり

あつたは海にちかき島をみるや中しんり

あつたは海にちかき島をみるや中しんり















古今秀歌十首撰てまひて留よと  
後鳥羽院より定家公の御返書に  
よみ入る歌

るまひてらうりのなまのやねらひん  
地やよしのよみひらひのこゝろ

貫之

あゝ露よきくねらひん  
しほひのよみひらひのこゝろ

下原物五

秋風の吹あそびなまのこゝろ  
らなゝあゝ波のよみひらひ

坂上是則

わさひのけあひのよみひらひ  
らなゝあゝ波のよみひらひ

壬生はつね

あまのつねのよみひらひ  
あまのつねのよみひらひ  
よみひらひ



なまの川せきありのねきあはるねに  
いふよきむらあひり先けん

巻

在原行年訓

ワくらんまよあはるすまのうた  
きあはるねつりよさしたるよ

よき人

たなうも申しよきんかき夜  
うさのうきなるうきなる

なのお町

ねのつちいづれさきまきりなつらに  
まきまきたすかきせんまた

在原行年訓五

そらわねつちのよのうのたか  
まひらもまひらまひら

一巻

菅家

このふいばあはるあはる  
もあはるあはるあはる



後撰集

つやまかづれぬものハチラビ—の  
舞よりあまきれるむしひちりり

文屋朝康

あらしの風のあまき—く扶ねハ  
つらねいさめぬこさくちとらる

天智天皇御製

扶ねの—の木のつたのつとあま  
—あま—のつとあま—

讀人不知

扶ねの—のつとあま—  
—のつとあま—

伊呂

おもしろい—のつとあま—  
—のつとあま—

泰議等

あまらしのつとあま—  
—のつとあま—



源等物

あつものちのよのくもるうしんじりて  
やのちうなまか人のあま

元良のそと

わらわのちのよのくもるうのしりこも  
きんくうひのまのちのちのち

在原行平朝臣

まのちのよのくもるうのしり川の  
ちのちのちのちのちのちのち

輝凡

ちのちのちのちのちのちのちのち  
ちのちのちのちのちのちのちのち

拾遺集

壬生忠岑

ちのちのちのちのちのちのちのち  
ちのちのちのちのちのちのちのち

惠愛法師

ちのちのちのちのちのちのちのち  
ちのちのちのちのちのちのちのち



人よりさしぬ杖さきりしり

まはらうしんまきしるまわらうしじ

二不さうしんまきしるまわらうしじ

よこひと介に

いさうしてきりくわらわんしのらた

あふあふのまきしるまわらうしじ

元良敦正

いさうしてきりくわらわんしのらた

五十

かなうくしてもあつんまうたしよ

柿本人丸

あひまきしるまわらうしじ

いさうしてきりくわらわんしのらた

右近

あひまきしるまわらうしじ

いさうしてきりくわらわんしのらた

徳徳云

あひまきしるまわらうしじ

あひまきしるまわらうしじ



方のさつとたぬきいれ

貞信

なぐらふまのまをむかひ  
いふとむの三ゆきま

友原道信

かきつわれいけよわきま  
とくまきまのんたき

後拾遺集

卷之部

五十二

かきつわれいけよわきま  
とくまきまのんたき

曾根好忠

林らうり月一たれい

たのきういふとく

氏之経信

きあつせいのきう  
このまき川のすま

藤原道信

三卷

七卷



かのうつくしたるもわがこころ

貞信

なぐさふらふのよきをばあは

ふたふたの三つもよきうら

友原道信

かきつたれいけいあまのこころ

とくあまのこころなまこころけ

後拾遺集 卷之部

五十二

三十一

かきつたれいけいあまのこころ

とくあまのこころなまこころけ

良道法師

かきつたれいけいあまのこころ

とくあまのこころなまこころけ

氏之経信

かきつたれいけいあまのこころ

とくあまのこころなまこころけ

藤原道信

七卷



あまねのくさくさのこゝろを  
けしめしめさるるけしめ

巨京美道雅

ひらひらとわらふる人さへ  
ひらひらとわらふる人さへ

清原元捕

ちかちかときらめく  
ちかちかときらめく

相模

うきうきわさねは  
うきうきわさねは

和泉式部

あまのこゝろの  
あまのこゝろの

氏部之経信

おきいりるる  
おきいりるる



金葉集

源後頼朝

一巻

やまをくらしきしやうりいさゝか

雲かきしゆきまのしき

源基俊

二巻

夜のよれ月まのたのてすまひ

いふとあきらくつくむすひ

大納言經信

三巻

夕まれのやまのつなをたづね

わのまらんたのむきうきうゆ

四巻

源兼昌

あんなまのりふちりのまじ

いふとあきらくつくむすひ

源道深

五巻

あけくしりかゝるゆんま

いふとあきらくつくむすひ

源後頼朝

六巻

あけくしりかゝるゆんま

いふとあきらくつくむすひ



祐子内親王家記伊

おぼしきくたのののあさけ

けや神のやれもうりたれ

和泉式部

十卷

もろきみに苔のうらら

ういもれぬう所まくり

お大僧正行尊

九卷

くらふよはあられとねん

もあしりあらしきり

小式部内侍

ねむしやういぬきよのふたれ

まうしきもやあゆめん

詞苑集

大親比匡房

一卷

あしきとこのゆきま

ういぬきのたまきり

伊勢土師

いしのなみの三つあはれ



けふこのふじないわらぬ

有原長徳様

あられあらしのこのくわさうらんを  
つれぬやうき人へみえれハ

有原實方様

いそがひがかりあやまらぬまき  
しらのやまのこすりうらハ

意速院御製

激なとやこつんにやううたまりんの  
まわしてまゝありんらり

源重之

凡ないつさつらんうけのあつれのと  
ふけくゆなわらふこゝろ

法性寺通和実白殿下

わこのふじいさつてつれぬはさこの

千美年様おまじり

源道深

黒ひのやわらりのをまらぬ



ケルニシテノミナシトイハルル

ノミナシトイハルル

ノミナシトイハルル

ノミナシトイハルル

ノミナシトイハルル

ノミナシトイハルル

ノミナシトイハルル

本五社宣胡ハ

清恒守浦士乃ノ心ノよるる

心乃ノまきつて物なこくわん

清少納言

ノミナシトイハルル

ノミナシトイハルル

法性道布美白奈下

ノミナシトイハルル

ノミナシトイハルル

源道深

ノミナシトイハルル



あさちりけしむに休風りふく

千載集

藤原清柏御玉

なつさひ火くさくしの玉のなよよと  
そわよそりさんゆぬあそ病

源俊頼御下

丁未月のこむねのさやしくまよと  
うきかまのたまのたよ川の三つ

圓位法師

四卷

日

九卷

ふよほくほあつまきまに  
丁未月人かひそわ

源俊頼御下

十卷

たつたのあまうつさく玉は  
あそわらう人をこわ

左京大夫顯補

たつたのあまうつさく玉は  
くらやそまんだまのうもれま

源俊頼御下



あさちりけくた休向りふく

千載集

藤原清柏御玉

なつさひ火くさくの玉のなよよと  
そわよそりやんゆぬあそぶ

源俊頼御下

丁卯月のこもたのきや  
うきものたまのたよ川の三

園位法師

ふよふよほむか  
丁卯月

Waka name translation

the book image

皇太后御成

あさちりけくた休向りふく  
恋のけりや

源俊頼御下



うりけり人をらむものやまおかしよ  
えけいれとこののぬせの海

西行法師

なげくそ月や心物をかよひし身は  
かこらふかちりわたりきこりぬ

友原基俊

来たきしとまはつるをのちにて  
あられちの材もつねり

皇太后宮主 友原基俊

母のしよ道よりふれけりいづか  
やまのねくよもぬきぬけり

新古今集

太上天皇

さくしゆくかやまののこりな  
るうしゆしゆわぬいられ

西行法師

あられしゆめくさ糸のつゆのこふり  
あまのつゆめくさ糸のつゆのこふり



太上天皇

口

秋の露もさびたのきくじやうん  
つゆのなみりやと返つていふ

後京極攝政家政官

五

きびしきさへしきりのしりあし  
こゝろのさびしきりてせん

西新住師

六

秋のやうなふゆのしりあし  
こゝろのさびしきりてせん

有原清捕物

四

冬かねのちのちのちのちのち  
わらわの月のしきりてせん

家隆胡臣

十

冬かねのちのちのちのちのち  
わらわの月のしきりてせん

大江嘉言

四

冬かねのちのちのちのちのち  
わらわの月のしきりてせん



太上天皇

上卷

神のつゆもあけぬいりもあきくさる  
うつれいりもあきまきし 飯小

西行法師

田

くまもあきまきし  
中書右馬大御親心法名 日華 中書

右八代集秀歌十首天保六年九月二日水野光枝  
書写之本事終之於不審魚不書一校之歟

抄巻和歌集 二十卷

三首八雲云云一首卷末ありゆき

八雲抄云長徳比石台抄云此一法在法皇御  
撰之後抄巻集序通稱云石山法皇云云  
の集云云云云云云云云云云云云云云云  
つげ後云云云云云云云云云云云云云云  
但新古今序の趣はれは後由撰云云云云  
八雲云云云云云云云云云云云云云云  
はかりはねりくワラも云云云云云云云



一孝後の所製をのりし

別抄抄より十巻あり  
予頁六百八十  
山後知抄一紙  
山後抄に  
光明抄云拾遺の  
近く  
す

山後河津師貞  
懐子永  
護

十月  
和二年  
二月  
切  
山

の  
を  
の



十の巻子公州六人歌合  
号牙仙  
 金玉和歌集源  
 室秘抄新撰隨膳和歌九品山抄の比老  
 此書和漢才人とのり  
 二学大周愚同賢佳云凡又歌下治世の戸あり  
 亂世の戸ありを聖代の風群をくく可る所  
 必美すくまや三代集八明許正雅也充軌  
 花とよくくく

古語拾遺

淳華競興遂寧舊老

願 家牒

台問 畜憤

一聞夫開闢之初

友折 アカラセナニ 剖判

天御中主神次高皇產靈神  
古語多賀美武須比是皇親神留伎命

次神皇產靈神  
是皇神留弥命此神子天兒屋命即中臣朝臣祖也

天日就鳥命  
阿波國忌部祖也



手置帆負命 讀岐國是部祖也

度狹知命

梯明玉命

天目一箇命

欲奉辭日神

鍾愛

六合

同措

鐵鐸 古語佐那伎

竹葉飯齋木葉

着鐸之矛

覆誓槽 古語字氣布祢約誓之意

作俳優

啓曰

恰

日御綱

阿那多能志

阿那佐夜齋 竹葉之

飯齋 木名也振其葉之謂也

天十握劔

然後素彗鳴神娶國神女生大己貴神

攘

禁厭

駢除

誅伏

矛玉自從



又勅曰吾則起樹天津神竹籬  
神籬者比茂侶伎及天津磐境之

惟尔 又大物主神

復勅大物主神宜領八十万神永為皇孫奉護焉  
督將元戎剪除穴渠

佐余 煞虜

惟根津彦者迎皇船表績香山之巔

宸駕 裏

天富命即於其地立太玉命社今謂之安房社今

房國是也

坐摩

掌其開闔

無有肩比

物部速祖饒速日命

内物部 令朝

靈時 鳥見山中

秩群望



天位

新羅王子海檜棺之為大社

東夷

淹留喻月

未禮典叙

展賞

皆有其祠未預幣例也

寄隸他族

宇豆麻佐

檢校

齋藏內藏大藏

藏部

小華下諱齋部首作賀斯

王族宮內禮儀婚姻卜筮事

陵遲衰微

勞

望秩之禮

專權

敷奏施行

起自天降洎乎東征

班幣

懷祕介推之恨

愷旋

颯如

天祖

抗



於保須我良尔伊佐登志由伎能与吕志茂

用能皮鹿皮角布示

洎

預

○工夫

大宰主神司

未刊除

大地主神

片巫志

肱巫今俗竈輪及未占也

奉謝

持

以天押草押之以烏扇之若如此

善古語以善言都須

老暉

靴政

朽邁之齡

犬馬之志且暮弥切

遇求訪之休連

從五位下齋部宿祢廣成撰

大同二年二月十三日



余抄 卷之五 新撰 四十四  
 今因歌之化  
 卷之五 卷之五  
 二高 新撰 仇  
 物余之は道  
 此之は物余抄  
 宿下之と云  
 延元元小御月  
 廿九日

一余道一流が朝奏物小越り事云々  
 法道唐約く風をういせといふも。此等乃事ハ  
 唐約説あるがらよ此等傳くおなふ用い。志うひて  
 了りて事案約の案新を成事也云々  
 が朝ハ毎中沙を退て國風を不失也。吳約  
 不此以ん代の意風を改く。南世の風俗を流布  
 するの也。仍吳新も皆改也。上下異  
 唐方が朝ハ毎中沙を退て。此皇子の比專  
 異國を去るひるのて。唐人の作の風俗を流布  
 して。之代の風を改く。此等傳くおなふ用い。志うひて  
 了りて事案約の案新を成事也云々

万北千五ノ

日七ノ

之、右歌六首兵部少輔大伴宿祢家持獨憶  
 秋野聊述拙懷作之。家持ノ撰ハ詔宣古事也云々  
 二月六日防人部領使遠江國更生坂本朝臣  
 人上進歌數十八首但有拙劣歌十首不  
 取載之。  
 元隆云 万葉集卷八 傳之記云 善無子三至ラズ  
 ト云々 拙劣歌之を取載ヤル古今集以下集ト云々  
 精撰ヲラスト云々 氏ニ云々 拙劣歌不取載之ト云々  
 九ノ三ノ二見ニ云々  
 二月九日上總國防人領使省自從七位下次田  
 連沙弥摩進歌者十九首但拙劣歌者不  
 取載之。以下云々 拙劣歌不取載之ト云々

日廿四ノ



万北ノ世夕

尔收奈加能阿頂波乃可美尔古志波佐之  
阿例波伊波ニ年加倍理久麻佐尔

右一首帳丁若麻續部諸人

阿良例布理可志麻能可美乎伊能利都ニ  
須米良美久佐尔和例波伎爾之乎

右二首郡賀郡上下大舍人部千文

右青結城郡矢作部真長

知波乃叔乃古互加之波能保ニ麻例等阿夜  
尔加奈之美於枳互他加枳奴

同七十七夕

同手才矢作

本元  
同三十一才

同

三

同社神

同  
同三十一才

同  
同三十一才

年浪他麻乃久留尔久枳作之加多米等  
之以母加去ニ里波阿用久奈米加母

久爾具爾乃夜之呂加美爾叔佐麻都理阿  
加古比頂奈年伊母賀加奈志作

阿米都之乃以都例乃可美乎以乃良波加  
有都久之波ニ爾麻多巴等刀波年

見和多世婆年加都乎能信乃波奈尔保比  
互里多互波女波之伎多我部麻

和

家持



万北ノ三才  
わづらひ

日暮七かき

詠色渡安 冊万北  
四

万北ノ三才  
わづらひ

和我傳喜我處涼草も初けはひもいとまもわかぬ氣の

社奈尔故都尔船平宇氣須惠夜加奴伎可古登く

能信互まき

蘇

冬日幸于敷員御井之時内命婦石川朝臣鹿

詔賦雪歌一首 詠日色渡

五月九日兵部少輔大伴宿祢家持之宅

集飲歌四首

ワ折れ我我度のたぐねはら信とあまは布礼  
神母侍るしやはら麦

石一首大原真人今城

しきりのあめはわづらひしきよぶぐや川原を五かむせ

右つと云原宿祢家持 五卷五十一頁中考  
たのまよとあり

九日比しよあるハ中夜まさうりあるはし  
のころわづらひくしきり 〇次も四月十日大目しきり  
しきのあめ

高山のいんほ小作らるはあめをさるくよふねの雲

小倉をたむ中川のたむやもあめがらんを原あやし馬鹿人

あけまじりやはらえの川のあめあまはきの作の初め

願壽作歌一首 左 大伴宿祢家持

左今 〇万北ノ三才  
七  
あけまじりやはらえ  
万北  
日暮七かき

左下  
葛原  
大目



百廿五  
りせ

冬 秋 鳴

出雲国 意宇郡 於保トアリ

口 廿五  
りせ

川にる所をわたりとて （？） 心ちりし （？） 心ちりし （？）

冬十月五日夜少雷起鳴雪落覆庭忽懐

感情作短歌一首 左 右首其少輔大伴宿禰

はるすおきし （？） の山 （？） 秋 （？） 鳴 （？）

勢多の言畏と於保乃守良半乃ひまて （？）

右極安宿禰奈村之臣 極ハ出雲ノ極ナリ

深川より （？） 深川 （？） 深川 （？）

天平寶字元年十月六日於内裏肆宴一首

あはれ （？） 月 （？） 日 （？） 日 （？） 日 （？）

大原 野井 真人

右一々皇太子也 叙 癸帝

皇太子多は （？） 皇太子 （？） 皇太子 （？）

右首内相藤原朝下奏之 （？） 藤原朝下 （？）

二十三日 靖於治 （？） 藤原朝下 （？）

都事 （？） 都事 （？） 都事 （？）

右一々 （？） 右一々 （？） 右一々 （？）

二年 （？） 二年 （？） 二年 （？）

令侍内裏之東 （？） 令侍内裏 （？）

藤原朝下 奉和宣 諸生 御等 隨地 任意

口 廿五

口 廿五



何云玉筆筆上玉ヲカキ  
凡書十リサテテラク

新古 手抄ハシ  
ノ年ノ手ヲ  
ラノトハ九ノホメテキリ

作歌并賦詩仍應 詔旨陳一緒作歌賦  
詩未得諸人之賦詩并作歌也

右一首大平寺古伴所好多持作但依大歲改  
不坊為多也

川よりものおきの青馬はけはる人かきり  
右一為七百侍宴右中弁大伴宿木家持  
預作此歌但依仁王會事

二月放式下大輔中臣清平呂朝臣宅宴歌首

四五十九  
又全之  
美之米受

哥負 四九六三

〜〜〜  
右一七下大輔大原今城真人  
萬集葉卷第二十終 此哥負凡四千五百四十二  
首内長二百六十六短四十二  
百十三旋从六十三

奥書 四六四

又校本日以并在金吾本書寫畢平安二年  
七月以數本比校畢 保安八 鳥羽天皇御宇十三年改元  
在天保八年應七百十七年

三假名雜合不同者倩案事情天曆御宇源  
順等奉 初初奉和刻之於漢字之傍付  
准假名死仍慕往昔之本故先度愚本於

同 四六六



弘長 龜山天皇  
二年改至長祿  
歷五百七十九

美安高倉天皇  
御宇三年改元至  
保八〇歷六百六  
十七年

元隆日陽和隆手授後  
乙丑〇文永二年九  
文永 龜山天皇御宇  
改元至天保八〇歷五百  
七十一年

應長花園天皇  
御宇四年改元  
美保年曆五百  
九十七年

文和後光嚴天皇  
即位元年〇至天  
保八年曆五百  
四十七年

寬永後光嚴天皇  
御宇三年改元  
位三年曆五百  
八年曆五百九  
十八年

漢字之右有假名畢是則其德非一故其  
德者料紙或三分一書寫惟安二者和漢  
相並見合無煩〇於是去弘長二年初春  
之比大年大貳重家鄉自筆本合校合  
之慶書漢字右祇有假名假本第一卷矣  
書云厚安元〇六月十五日以平三品經本  
手自書字畢〇然而道凡手跡本假名款  
別書之〇文永三年歲次丙寅丑九其三日  
檢律師仙覺記之

書寫本曰

此書書寫成後記至與  
書無之禁御本與有之

應長元年十月廿五日

以相傳說不殘秘訓授申源幸公託

陰蕨茂代玉松之枝緒吹凡赤土路津葉分野佐良

之光波 桑門寐印辨

文和二年癸巳中秋八月二十日信檢之僧都

成後記之

寬永貳拾年〇續蠟月吉日洛陽寺町抄寫前

安田十兵衛新刊



万第一  
加萬目

西

鶴

月後 額田王

かき

て

て

国原波煙之龍海原波加萬目立多都

社丈夫登念有我母草枕客尔之有者思遣

鶴寸平白土比亮

此

に

齊明紀伊後國熟田津比三木枳陀豆

社

二和山

者知

波友横山

十市皇女参赴於伊勢神主時見波多横山

出嚴吹黄刀自作歌

都波多神社 和名抄 二月朔八太師ありととてこの様

河上乃四いりひり

麻流王派於伊勢國伊良原島之時人哀

傷作歌

うちり

麻流王國之感傷和歌

ふ



万一五智也  
吉野名所

右案日本記曰天皇四年乙亥夏四月戊戌  
朔乙卯三品麻呂王有罪流于因幡國  
一子流伊豆島一子流血麻嶋也是也配  
于伊勢國伊良彦島者若疑後人誣  
款辭而誤記乎  
累朝之世は其の事いづれも勝  
て同よき志士の答志く  
心して海へ下りて多し其の由るは古今著  
實集に伊と回すもいづれも其の由るは古今著  
實に記す  
耳我嶺 考之志十三は身の日さたろ奇金御高と  
あれと金ハ岳の湯くろた耳我と書しよ金と

まろるは世金の嶽とす下吉野山の甲も  
孤ねるる石を即は此方の初よりくかきしぬ  
おれい古くよりく流欠我流とらひる  
よふ負我流とたすれんもあねをみ金  
のりといふはなせり金の嶽といふことわれ  
あしとされるはかよたあしと考へ

月  
藤原のま  
月後  
のまきり  
月前  
大津宮  
毛芥

藤原宮御宇天皇代 景解之為原の持統文武二代  
のまかり  
春草之茂生有霞立春日之霧流之 春草  
人テ也  
石走淡海國乃禁浪乃大津宮尔天下所知食兼



万  
大津宮反奇充

日高市連黒人感傷  
正落著作歌  
畧解云堵八都古月

越前熊山時阿闍  
皇休作歌

幸于紀国時  
以次ノ奇  
ワ底介也

幸于吉野  
か人ノ是作  
て并程予ニ

門七奇  
畧解云  
正落著作  
つる  
も  
ワ  
○  
又  
内  
らん

樂浪之思賀乃幸崎まきあれとあ人あたはる

古人尔和禮有哉兼浪乃故京平見者悲す

畧解云  
あれとあ人  
あれとあ人  
あれとあ人

あれとあ人  
あれとあ人  
あれとあ人

あれとあ人  
あれとあ人  
あれとあ人

あれとあ人  
あれとあ人  
あれとあ人

日本紀曰朱鳥四年庚寅秋九月天皇幸紀伊

四  
畧解云  
天皇四年  
幸あり

珠水激瀧之宮見礼跡不飽可聞

畧解云  
の  
の  
の

あれとあ人  
あれとあ人  
あれとあ人

あれとあ人  
あれとあ人  
あれとあ人

あれとあ人  
あれとあ人  
あれとあ人

あれとあ人  
あれとあ人  
あれとあ人

あれとあ人  
あれとあ人  
あれとあ人

あれとあ人  
あれとあ人  
あれとあ人

あれとあ人  
あれとあ人  
あれとあ人



山川も因て奉る神なうたす川がうらうし船出せは

幸于伊弉國時留京柿本朝に人唐作歌

のたに船乗す心をとらる玉櫃タマコのまは玉が

幸三回英虞部エウロより行宮のあれハ高よりわ

剣若由布ニフのさきよともがらふあ人のまはる心

幸四等志部

潮ウシの波ははらばはら揚船塔のうらみの荒島アラシマ

この冬兩國のうらみもくくまのあまの  
所とよはなりや向し神修上はくまの  
所とよはなりや向し神修上はくまの  
所とよはなりや向し神修上はくまの

さきおの  
の和歌の約の  
さきおの

高ノ身久石  
事化系

今始新の  
の始新也

石上大臣從駕  
作系

重さし具解

此

輕皇子 文武天皇少名

文武天皇  
輕皇子命 用和自皇子

輕皇子

わらばをハまうとまうてわらふよりまはらハるまよ  
ゆららる

つせえいひらうらむらむら川もれ陸の山ははら

伊賀國石碓郡

吾妹をいほえの山をまうたのまのえの國を

伊賀國伊佐和神社 幸三回伊佐和神社を有は國の  
すまひまをいほえの山をまうたのまのえの國を  
の山をいほえの山をまうたのまのえの國を

旗須為寸四能乎押麻 人ノ名書

輕皇子宿于安騎野時柿本皇麻呂作歌

此の山をいほえの山をまうたのまのえの國を

輕皇子



藤原宮之役民作歌 此歌持統天皇八年正月清原  
原高直とてに遷都すは初ま造りては民の  
中よりよめとてあのおり十市部とて香山再築歌火  
三山のちゆし

身毛多奈不知

伊藤波久見者神 随尔有之

藤原宮御井

藤原宮御井歌 奇よ教井 原とてのりては皇の  
は所よとての清水もそよある石も新しうや  
香山の西北よと清水もそや

且解ニ成務記以東  
西為日縦南北為  
日横

高知也天之御蔭天知日乃御影乃水許曾

波帝尔有木御井之清水

巨勢山を名乗るを巨勢河を徑く此の國を行く

亦打山 下は木海よ入るまはら山とてまんとく又和道ま

西紀の國の記

いげとが船をすてんあのみまき持て五行 柳を舟

○辛賢 素戔太上天皇幸于參向國歌

右一首高市連黒人

和名美麻屋不破郡荒崎三由は幸とて高市連御歌す  
紀三入ゆれおそりまこと三阿の心しつたる

わらわさ



伊賀ノ名張郡  
のりいのみまると  
つらくはうしと  
てい

的形浦

武ニ伊勢國多氣  
郡服部麻乃  
方神社トアリコ  
カヒ

安良礼松原  
住吉

いよあひれあしとゆると隠小公平本  
○長皇子御歌 天武天皇子御ニヨリテ所作歌と云

舍人娘從駕作歌

内をらむはやとえとと之而ひつる圓形波見ル  
仙芝抄ニ伊勢國志保等々  
以為名也今已跡絶成江海天皇御此浦邊歌云  
麻須良遠能佐都夜多波佐美牟加比多知伊麻夜  
加多波麻佐气佐 上六序之的形浦上ノ字ニハヒキ  
長皇子御歌

霰打おし松原すまはれむらとれねも

高師濱

太上天白王幸于難波宮時歌

又伴の高師のこはの松原もきてしゆ他家も好

高師ハ和泉國又島郡ニル<sub>レ</sub>紀ニ見<sub>レ</sub>工

右首置始東人 紀ニ置深ト云同氏ト云

大伴乃美津能濱尔有彦貝家尔有妹乎巨而会哉

右首身人部王

多美礼客去天跡知麻世慶岸之埴布尔仁金播散麻思乎

岸之埴布



家乃中山  
吉野内和洋  
官近き所なり

大行天皇

右一首清江娘人進長皇子

元隆多植布コトヲ云ル旅行  
科装束下贈進テヨルカ

○太上天白<sup>幸手</sup>吉野宮時高市連黒人作歌

○太上天白<sup>幸手</sup>吉野宮時高市連黒人作歌  
為度のあつり何すまは候と云々  
しと和らふべき

大行天皇文武天皇ヲサシ奉ル崩ニテテ御遺言ニ

乃大行天皇下申さる所の事

夜の奇とも傳中て記す

大行天皇幸于吉野時歌

宇治間山朝凡寒之旅尔师手衣借應妹毛有勿久尔

右一首長屋王

和銅元年戊申夫皇御制衣歌

丈夫之鞞乃音為奈利物部乃大臣楯立良思母

磐床等川之氷凝

和銅五年壬子夏四月遣長田王于伊勢齋宮

時山邊御井歌

其處ニある所  
宣き云伊勢上堂村と云有

大臣  
保方可きと

氷ニリ



竈神 傳野

とて所井の流とて今も残れりといふ

近乃御井平見我氏利神風乃伊勢慶女等相見鶴鴨

事記曰故大年神云又娶天知加流美豆比賣生  
子奥津日子神次奥津比賣命亦名大戸比賣神此  
者諸人以拜竈神者也

和名抄三四声字音苑云竈嬰慶也和名加萬

万多二 可麻度 竈處ナリ

式二 筑前国御笠郡 竈門神社 名神

傳云

和名三竈竈後  
穿也和名久度  
竈字書見二入  
害ノ誤也

紀伊國名多郡三竈山ありて竈山神社を式と見ゆ是  
七世神とて之を竈神とて此古神比賣神 二柱  
をまつりけり此は竈神一柱ありて之を竈神と  
謂ふ由地豊事を教のり 切ある神とて  
續紀二天平三年二月神祇官奏庭火御竈四時祭祀  
永為常例  
大膳式ニ御膳神八座高部神一座竈神四座竈  
神四座とありて各其の科物品載せ右四座  
春科依前件秋亦准之とてやありて



其形小者ありて なるに日三に當りて 祭火のなるは  
此の時式に山に竈を築き 神井を築き 中宮柳を築き 東  
之に鎮座を鳴き 祭火のなるに 三に竈神の如く  
公家にも亦の如く 法良の如く 亦の如く 三に竈  
又之の如く 江家の如く 亦の如く 四方拜座人  
儀小竈神を拜し 三



